

平成23年 2月 8日

平成22年度総研大全学教育事業実施報告書

申請区分	総研大レクチャー
プロジェクト名	日本歴史研究の方法 B -地域調査の方法-
申請代表者 (事業実施責任者)	研究科：文化科学研究科
	専攻：日本歴史研究専攻
	氏名：小池淳一

## ■ 要旨

本事業は、日本歴史専攻において企画、開講された日本歴史研究の基礎的な方法を学ぶための3つのコースのうちのひとつである。ここでは実際のフィールドにおいて、歴史・考古・民俗などさまざまな資料を現地に即して調査、分析、活用する方法を学ぶことを目的とし、今年度は特に山梨県甲府盆地を中心に、山梨県立博物館の全面的な協力を得ながら、地域の歴史像を多角的に描き出す手法を実地見学を織り交ぜながら学習した。

## ■ 事業概要

**実施方法** 要旨にも示したように、総研大のキャンパスを出て、具体的な地域社会において、広義の歴史研究を遂行していくために必要な方法を学ぶ形式をとった。

本年度は甲府盆地を取り上げ、山梨県立博物館のサポートのもと、甲府および近隣の文化施設、史跡、博物館等を実地に見学し、さらにそうした文化的な史資料の発掘、保存、活用、研究等にまつわる諸問題について専門家の講義を受けた。また担当する総研大の各教員は山梨県下に事例を求めながら、それぞれの学問領域における方法論についての講義を行った。

**実施状況** 具体的な日程と講義テーマは下記の通りである。

7/29(木)

- 13:30 集合、日程説明・自己紹介
- 13:30～17:00 甲府市内巡検（マイクロバス利用）  
講師・平山優氏（山梨県立博物館）

7/30(金)

- 8:30～12:30 山梨県立博物館見学（解説 中山誠二氏・山梨県立博物館）
- 12:30～13:30 昼食
- 13:30～17:00 講義 I（山梨県立博物館生涯学習室）
  - 13:30～14:15 中山誠二氏（山梨県立博物館）  
「山梨県立博物館の概要」
  - 14:15～15:00 高橋修氏（山梨県立博物館）  
「山梨県立博物館の活動」
  - 15:15～15:45 高橋一樹（総研大）  
「中世史研究の視点から」

15:45～16:15 村木二郎（総研大）

「考古学の視点から」

16:25～17:00 平川南氏（山梨県立博物館長／国立歴史民俗博物館長）

「特別講義・出土文字史料研究と私」

7/31（土）

9:00～12:00 講義Ⅱ（スパランドホテル内藤 会議室[多目的室]）

9:00～9:30 久留島浩（総研大）

「近世史研究の視点から・Ⅰ」

9:30～10:00 岩淵令治（総研大）

「近世史研究の視点から・Ⅱ」

10:10～10:40 山田慎也（総研大）

「民俗学の視点から・Ⅰ—儀礼を中心に」

10:40～11:10 小池淳一（総研大）

「民俗学の視点から・Ⅱ」

12:00～13:00 昼食

13:00～16:00 山梨県立考古博物館、甲斐善光寺見学  
（特別協力・吉原浩人氏・早稲田大学教授）

16:00 甲府駅にて解散

**達成された成果** 参加者は文化科学研究科日本歴史研究専攻から6名、物理科学研究科機能分

子科学専攻から1名、先導科学研究科生命共生体進化学専攻から1名の合計8名であった。日本歴史研究専攻の学生にとっては自己の専攻および近接する学問領域に関する知見を地域研究という視点で深化する機会を得たことになり、他の専攻から参加した学生にとってはふだん接することの少ない文科系の研究領域のフィールドや対象、方法論を知り、かつ社会還元に関わる方法を実地に学んだことになる。学問領域の差異にとどまらず、対象把握の方法や成果提示のルールなどの面でも違いがあることが確認できた。加えて相互の研究の内容理解もさることながら、研究における習慣やプレゼンテーションに関する文化の存在を意識することができたのが大きな収穫といえよう。

**問題点** もともとは日本歴史研究専攻における集中講義が母体であり、それを拡大し、他の研究科に門戸を開くかたちで準備されたものであるために、他の専攻、他の研究科に向けて、この事業の存在を広報する手段が微弱である。また一方で、学外に出て実地で学ぶという形式のために受講学生の数をあまり大きくできない憾みがある。

文科系の研究を理科系の学生が具体的な現場に即して知るという機会は別のかたちでも企画されてしかるべきではないだろうか。また理科系の研究においても文科系の学生への説明や共同作業の場を設ける努力があってもよいように思われる。文理融合や学際的な研究の発達は具体的な現場経験の積み重ねからしか実現しない。

## ■今後の事業展望

実施状況の問題点の項にも記したように、こうした形式の事業は多人数の学生を対象に実施することは原理的に難しい。現在のような少人数による濃密な形式の事業を継続する一方で、日常的な文理の枠を越えた研究交流の基盤の上に、学生のニーズを汲み上げるシステムを構想し、試行を繰り返していくべきであろう。

本事業については細部の手直しを行いながら、地域の歴史研究施設との連携の上に、継続して実施し、さらに総研大の知名度をあげるための工夫をしていきたい。具体的には、代表者の私見ではあるが、この事業における講義を一般向けの総研大の研究者による講演に読み替えて宣伝活動の意味合いも付け加えるようなことができないか、と考えている。